

大手前高校防災通信

こ あん し き 居安思危 ~ その4 ~

居安思危 思則有備 有備無患

～ 安きに居りて危うきを思う 思えばすなわち備えあり 備えあれば患い無し ～

(出典「春秋」の注釈書「春秋左氏伝」)

逃げるのは難しい!



◎ 台風19号とその後の大雨被害について

10月に入ってからの相次ぐ台風や台風に伴う記録的な大雨によって、関東から東北にかけては川の氾濫や土石流、崖崩れなどでかつてないほどの大災害が起こりました。あまりの被害の大きさから、先月29日に国は台風19号の影響で相次いだ災害について、大規模災害復興法に基づく「非常災害」に指定することに決めました(公布・施行は11月1日)。非常災害の指定は平成28年に起きた熊本地震について2例目となります。大規模災害復興法は東日本大震災を受けて平成25年に作られた法律で「非常災害」として指定された災害は、被災した自治体からの要請に基づいて道路などの復旧工事を国が代行して行えるようになります。また、同時に「激甚災害」にも指定され、これにより土木施設や農業施設、公立学校などの復旧費用や、図書館などの公共施設、私立学校への支援も行われます。

今回の台風では川の堤防が壊れたり(決壊)、川の水が溢れたり(越水)して多くの場所が水に浸かりました。国土交通省によると決壊箇所は71河川、140カ所となっています(11月12日時点)。また、16都県の延べ301河川で氾濫が発生し、浸水した面積は少なくとも25,000haと昨年起きた「西日本豪雨」を超える記録的な豪雨災害となっています。また、土石流や崖崩れなどによる土砂災害は少なくとも20都県で805件確認されています。

今回の台風による被害では特に逃げる途中で亡くなった方が多く、死亡・行方不明となった人の6割は屋外での被災であり、その半数が移動中の車内でした。警報が発表されて、仕事場など出先から帰宅する途中や、予想をはるかに超える雨量に川が溢れ、水が来たのを見て慌てて避難をして被害に遭われた方もいらっしゃいました。

地震と違って台風は予め予測ができるから備えやすい、と誰もが思いがちです。でも今回の台風による被害を考えると、果たして本当にそう言えるのか疑わざるを得ません。



◎ 災害心理学では・・・

実は災害時に一番難しいことが「逃げる」ことです。「身の危険を感じたら安全な場所へすぐに逃げましょう」と言われますが、身の危険を感じたときには逃げるタイミングとしては既に遅いこともあります。そのため災害を予見して早めに行動をおこすための仕掛けが必要です。仕掛けのひとつとして、災害が予見されるような自然現象時のタイムラインを事前に作成して見るがあります。自分や家族のタイムラインを作成することで、リスクを知り、逃げるタイミングを事前に考えておくことができます。そして、いざというときにタイムラインを参考にしながら行動することで、危険を感じる前に災害を予測して「逃げる」行動につながります。

テレビやネットなどで台風の状況が刻々と伝えられ、避難情報をアナウンスされても、「あなたは避難した方がよい」とか「あなたは大丈夫です」とは決して言ってくれません。それぞれが得られた情報を元に判断して、行動するしかありません。正しい情報を得る方法、そしてそれを活用して行動につなげるための仕掛けを考えておくことが大切です。

避難所生活について考えてみる・・・

避難所生活の光景といえば、雑然とした体育館の固い床に雑魚寝しているイメージの人が多いのではないのでしょうか?現在の日本の避難所の多くは学校の体育館です。体育館は冬は寒く、夏は暑く、生活を送るには決して快適な環境とは言えません。不便な避難所に行くことを躊躇って、自宅で被害に遭う人もいます。これだけ毎年様々な災害が起こり、一時的な避難だけでなく、もっと長い避難生活を送らなければならないこともあるのにもかかわらず、避難所が快適にならないのはどうしてなのでしょう。最近ではダンボールベッドや衝立などの利用が増え始め、以前に比べると少しくなりましたが、世界レベルからすると日本の避難所の状態はまだまだ良いとはいえません。

被災した人が尊厳ある生活を送るための世界基準として「人道憲章と人道対応に関する最低基準(Humanitarian Charter and Minimum Standards in Humanitarian Response 通称スフィア基準)」があります。これは被災者が人らしく生活できるための最低限のルールとして設けられた基準です。この中には、1人当たりの居住空間は最低3.5㎡、トイレは20人に1基を男性1対女性3の割合で設置することなど避難所の基準が書かれていますが、一番大切なことは最初に記されている「すべての被災者は、尊厳のある生活を営む権利があり、そのために人道支援を受ける権利がある」ということです。この基準を最低レベルとして、高齢者や小さな子ども、障がいを持つ人など、全ての人がある一定の快適さを持って過ごすことのできる避難所を作ることが大切です。いつ自分が被災者になるかわかりません。過ごしやすい、避難しやすい避難所とはどんなところなのか、これからの避難所はどんな場所であるべきなのか考えてみてください。

～ 緊急避難場所と避難所の違い ～

緊急避難場所：地震、津波、洪水等、災害による危険が切迫した状況において、生命の安全の確保を目的として緊急に避難する際の避難先

避難所：災害の危険性があり避難した人が、災害の危険性がなくなるまで滞在したり、自宅へ戻れなくなったりした場合に一時的に滞在することを目的とした施設

先日、みなさんの大先輩である詩人の佐々木幹郎さんの講演を聴く機会に恵まれました。演題は「3・11と中原中也の詩」。中原中也といえはその風貌も相俟って、ロマンティックな詩を書く人として思い出す人もいらっしゃるのではないのでしょうか。

講演ではご自身の高校時代のお話や詩人となった経緯、言葉というものの持つ意味についてお話になったあと、東日本大震災を経験した後、詩の持つ言葉の意味が変わったことをお話されました。震災の前後で変わった言葉の持つ意味について、みなさんにもぜひお伝えしたいと思いましたので、ご紹介させていただきます。

2011年の7月、気仙沼の海岸に立たれた佐々木さんは目の前に広がる光景に言葉を失くしたと仰いました。震災前の気仙沼は、世界三大漁場の一つである三陸海岸沖から揚がる新鮮な魚介類を扱う大きな漁港があり、海岸沿いには水産加工の工場や店、住宅がひしめき、にぎやかな港町でした。それが震災後の気仙沼は、地震と津波によって建物は全壊し、まだ水に浸かっている場所があり、地盤沈下の為に道路が潮の通り道となって、夕日を受けた道は鏡のように光っていたそうです。佐々木さんはその光景を目の当たりにされて、自然の猛威を見せつけられたこの光景にはどのような言葉も太刀打ちできない、言葉が抉り取られた気持ちがしたそうです。圧倒される光景を前に、夕日に輝く海を眺めているときにふと思い浮かんだのが中也の詩でした。

中原中也の生前に発表された唯一の詩集『山羊の歌』の中の「盲目の秋」です。この詩は作者の伝記的事項に寄り添って読めば、別れた女性への恋愛歌です。しかし、佐々木さんは大震災後の被災地で冒頭の詩句を思い浮かべたとき、まったく別の読み方をされたそうです。



活気を取り戻しつつある気仙沼漁港の様子

この詩が人間にとって普遍的な「悔恨」と「愛」を、大きな幻を見つめるようにして歌っているように佐々木さんには感じられました。詩が作者の意図を超えて、そこに立つ佐々木さんのところに響いたのです。

津波で何もかもが流され、「風が立ち、浪が騒ぐ」荒涼たる風景を見ながら、中原中也はなんと普遍的な詩の世界に立ち向かっていたのか、と改めて感じられたそうです。ある日の日記の中で中也は「一切の過誤に対して自然は即座に過不足もなく足払ひをくらはす」と記しています。この詩は、自然に対してこのようにつねづね考えていた中也だからこそ生まれ、だからこそ、被災地で思い浮かんだのではないかと仰っていました。

今回この講演を聴くために改めて中也の詩を読み返してみたのですが、昔、私が高校生の頃

に読んだ時とは違う世界を感じました。そして、佐々木さんのお話を聴いた後には、また、まったく違う観点が生まれました。震災から3年後の平成26年に、私も気仙沼を訪れたことがあるのですが、その時には町中はすいぶん復興が進んでいました。しかしきらめく美しい海とは対照的に、海岸沿いはがらんとしていて、その風景は津波が全てを流したのだということを否応もなく感じさせられました。海が美しければ美しいほど、その落差に胸が潰れる思いでした。

あらためて、気仙沼の海を思い出しながら、この詩を声に出して読みたいと思います。



かつてJR気仙沼線大谷海岸駅があった場所

中原中也 こぼれ話

- ◎ 中原中也といえは憂いを含んだやさしい面立ちで、書く詩もどこか儚く、かなしげ…しかも早世したので、なんとなく耽美なイメージがありますが、実際の中也は喧嘩っ早く、酔うと絡み癖のある人だったようです。
- ◎ 中也は16歳の時に京都で関東大震災に遭遇します。みなさんはもう少し小さい頃に東日本大震災を経験しましたね。中也が大震災についてどう考えていたのかはわかりませんが、自然に対する考え方に震災の経験の影響があったのではないのでしょうか。
- ◎ 山口県湯田温泉に「中原中也記念館」があり、その生涯が紹介されています。中也は故郷の山口に帰りたくて願いながら、病のため鎌倉で30歳という短い一生を終えました。記念館のある湯田温泉は町のあちこちに足湯があり、海の幸、山の幸に恵まれたとても素敵な町です。中也の詩集を片手に、機会があればぜひ一度訪れてみてくださいね。

盲目の秋

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限の前に腕を振る。

その間、小さな紅の花が見えはするが、
それもやがては潰れてしまふ。

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限のまへに腕を振る。

もう永遠に帰らないことを思つて
酷薄な嘆息するのも幾たびであらう……

私の青春はもはや堅い血管となり、
その中を蔓珠沙華と夕日がゆきすぎる。

それはしづかで、きらびやかで、なみなみと湛え、
去りゆく女が最後にくれる笑ひのやうに、

巖かで、ゆたかで、それでゐて侘しく
異様で、温かで、きらめいて胸に残る……
あゝ、胸に残る……

風が立ち、浪が騒ぎ、
無限のまへに腕を振る。

(全四節のうち、第一節。)